

序

人間社会に関わる環境には様々な流れ、例えば物質、人あるいは流体の流れがあるが、これらの動き、形、色を捉えることにより、現象を正しく可視化しようと言う試みがある。これらは、飛行機、自動車、船舶など直接流体に関わる分野では勿論のこと、建築のように周辺気流や冷暖房設備などを扱う分野などでも、技術上極めて重要な問題である。「流れの可視化学会」はこうした趣旨で1973年に設立された。そして今回その対象を「流れ」から「情報」に変え、去る1月「可視化情報学会」として再発足した。要は、流体の流れに限らず熱・音・濃度・電気・磁気あるいは反応を伴う流れなど多くの分野の流れ現象を実験や数値シミュレーションで可視化する方法そして可視化された画像情報をコンピュータで加工・保存・伝送・再表現する方法などを扱うと言うことである。

近年、所謂学際的な学協会が数多く設立されるようになったが、これはある現象の解明には様々な専門的アプローチが必要になってきていること、さらに一般に研究には分野は違っても共通に有効な方法のある事を意味する。それを可能にするのは基本的には現在、多くの学問を成立させている背景に共通な思想があるからである。ある現象には必ず因果関係が存在しそこに何らかの法則性が存在するというのが、自然科学の大前提になっている。それ故にこそ正確な現象把握が研究の第一歩と考えられる所以でもある。従って現象の中に隠れた「見えないものを見るようにする」事自体が研究と考えられ、そういう意味では可視化情報学会は自然科学に関わる全ての分野に共通する問題を扱っていると言える。

ここで面白いのは、「見えない」ことの意味である。早すぎて目に止まらない、小さ過ぎて見えないのは当然としても遅すぎても、大き過ぎても見えず、また場に働く何らかの力とか非連続的事象は一般には見え難い。しかし一方、研究は何でも見えるようにさえすればよいと言うものでもない。現象には見え過ぎて困る場合もあり得るのである。何も大気中の塵埃が全て目に見えるようにする必要はなかろう。研究にとって大切な事は先ず「何を見えないものとして見るか」と言う事である。可視化情報学会設立記念パーティで日本流体学会の初代会長今井 功先生が「ものを見えないようにする技術も必要」と述べられたのは蓋し卓見であろう。

1990年 4月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦